

平成28年4月28日、政策秘書課職員に話をした内容です。

## 40代、50代のモデルに

今、国は、地方創生のため、都会の元気な高齢者が移り住む“まち”を、地方に整備する日本版CCRC（Continuing Care Retirement Community（継続なケアを受けられる高齢者の地域共同体））構想を進めています。

発祥の地であるアメリカのCCRCは、健康なうちから移り住み、医療や介護を受けながら活動的に暮らす終の住みかですが、日本版のCCRCを国は、高齢者が安心して暮らせる「生涯活躍のまち」と位置付けているようです。

今年2月、本市を石破地方創生担当大臣に視察いただきました。そのとき、私は大臣に「一部の地域だけで行うCCRCではなく、まち中がCCRCの長久手市にしたい」と発言しました。

リタイア後の人々の暮らし方のモデルを作りたいのです。しかし、それは、高齢者のためだけの施策ではありません。

私は、「時間に追われない国（＝地域）」と「時間に追われる国（＝会社等）」が存在すると考えています。

今の教育において、子どもたちは、「時間に追われる国」へ行くための訓練をしているようなものです。かつては、定年後まもなく平均寿命を迎え、「時間に追われる国」の住民のまま一生を終えていたのですが、今は、平均寿命が延び、再び、「時間に追われない国」へ戻り、そこで長い時間を過ごすことが必要になりました。今は、「時間に追われる国」へ行く訓練はあっても、「時間に追われない国」に戻る訓練の場所はありません。「時間に追われない国」＝「地域」に戻っても、会社員時代の価値観を引きずったままで、地域や地域活動になじめない人が非常に多いように思います。新たな「落ちこぼれ」が生まれてしまっていると言ってもよいかもしれません。

自分が住む地域のことを自分達でワイワイと考える市民主体による計画づくりは、まさに、地域に戻るための学習をするための最適な訓練です。今は、本市での先例がないため、職員も市民のみなさんも手を焼いていますが、今、やっていることが、40代、50代の人たちがリタイアしたときのモデルになります。市民主体のまちづくりは、決して、既にリタイアしている人たち高齢者のためだけの施策ではないのです。

時間に追われない国	時間に追われる国
子どもや高齢者のいる暮らしの場 ⇒生活集団	学校、企業等働く人のいる仕事の場 ⇒目的集団
○いろいろな人々が一緒に暮らす	○同質の人たちを集める
○プロセスを楽しむ	○最短距離を最高の効率で結果を求める
○存在そのものが大切	○能力に価値がある
○人の数ほど答えがある	○正解がある
○いつも未完成	○完成解決をめざす
<p style="text-align: center;">子ども時代</p> <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">60～80歳 10万時間</div> <p>* 睡眠時間、食事時間等を除いた自由時間 14時間×365日×20年≒10万時間</p>	<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">20～60歳 10万時間</div> <p>* 社会人の労働と通勤時間 10時間×250日×40年≒10万時間</p>

～市長の話を聞いて～

先日、聞きに行った講演会では、今の40代、50代が、10～20年後には自らが高齢問題の当事者になる危機感を持つことが大切であると聞きました。

確かに、私にとって高齢問題は親の介護をどうするかであり、私が高齢になったときのことは不安過ぎて、想像すらできないという感じでした。

しかし、働く時間と、老後に過ごす時間が同じと知ってから、リタイア後の自分について、どう過ごしたいのか、何がしたいのか、そのために今から何をすべきなのか、少しずつ考えるようになりました。すぐに答えは出ない問題ですが、こうした当事者意識を、40代、50代が持ち始めることで、地域との関わり方も変わってくると思います。

同じ講演会では、「健康より元気でいることが大切」という話もありました。元気でいるためには、「今日、用があって、今日行くところがある」毎日が必要だと感じています。